

# 止戈類纂

和	二	五	二	三	類
書	九	七	二	三	
門	四	八	九	號	
	冊	架	函	冊	

內	五	二	和
閣	四	三	書
文	三	三	
庫	架	冊	類

內閣文庫	番號	和 25223
	冊數	49 ( 45 )
	函號	154 20

卅八



止戈類纂第三十八

刀劔

明治十二年購求

豊藤熟之編輯

鈴木重壽南  
山樓珍藏之記

元和二年四月十五日於荒久吉史を右之池に腰物之表  
以手分り見あはれ居る今日科人とも免れし概に  
久吉史波に腰物を送り口次の子近う居りぬ又右  
罪の極しと若くは能致吟味あめし概にとし意也久吉史

早速あめし腰物を持清前居り出ぬ切ぬの  
久吉史中よりし忍劔とす方りなぬ久吉史高直  
と壇近切人の故刃のたしとすあめし清徳徳利  
は為両刃のたし振けし腰物して四子孫長久し守神

てなる成の上意ゆくも信口鞘へ口納は長成人  
二寸五分幅を寺に奉る 坂本古日記

元和二年四月十二日晚よ及て細戸尻敷筑之を主とて  
尚小帯させぬ池の口刀を拵るへしと命せられ即  
是とよる 神祖此刀を拵る持の者坂九を信光正と  
お儀し眾科人の死刑は極たる者と申願は試むしと  
命せらる即ち口刀を拵て口次の方へ出の時返され必死  
に極する眾人あきよ於てハ試もよ及すと怒り命せらる  
久を申す及て死罪決定の者あるは返り清刀と申て  
あれと斬る申願快く夢の中見んあくは煙止落れ門の中

まきも清枕刀と誓きへしと申す口刀は執せられ試らば  
揮るせのいけ長刀と申ては縁長久の神と作ししと  
清鞘は他め流しけ清刀と誓い人申す許のみよ以莫耶  
之劔摸之中屋妙傳所持と彫刻す黒敷赤洞雜の目  
貫きり久能の神劔は納めきるあきり 久野記

東照宮豊御以前に池傳太、他の清刀と申あ先さうせ  
清室棟杭に置たるは、口劔も清他界塔より野山は清神  
劔とも成る申右傳太、他の口劔は元武田家の侍桂山  
十郎所持してそのつもの劔と号せしやけは劔久野山の  
清神劔とも成り、京陣落去以前は清神前は納る如の

けぬ劔のちを  
ひかへて  
リハヤノワルキウ  
ワス也  
中心は彫り  
あり

清敏自然子孫出のありき切きとあり血とそくとしり  
夫より為すすともや此清敏年々を常とらるるに敏  
の扱いと一ありて哉とや 和世説

源君清指料宗と左文字中心の織田信長お取合の義元  
と時を指し敏とあり即ち守葛蒲政宗ゆん守是に  
楚田と云さびしむ士指上るる故よ永代の知れりい  
扱方の二腰清秘差不淺誓鞘いづくもいりらむせぬ  
口指を成いた坂へい宗と左文字国々事い葛蒲政宗 或功雜記  
児のふかしくもいしむる刀を 家康公の口指たりと  
敏よ國々事い陣の時とせむひては勝利ありとて

すられぬ秘差せむきのみより夜に奇異のゆりあり  
清を刀あり水戸の杉原云へあしせられとて國へ結  
と一と辛和語

本城重長数子騎と辛一尾浦の城へ押寄りて  
城の中人堂様も右馬次草鬼虎と助よ向て國へ  
ことくしては此城ありて勝利とゆん事一物成されと  
速よあし出とるやうに討死せんしねるも四身も續々と  
て十の里系ありてお出二子よちりて我より案の如く  
城中よむぢりの者ありてお死ふちを扱とる今いふも  
いぬめりなりとてお一人いふなりて重長う先陣

とあ敷し三階へ掛へんと志すも虎の助りなき馬は焼  
ぬり志すりよと名もなる止りし之はなりておして七  
あはれ哉と痛手解多あつり今ハ是迄なり追討の  
右馬奴として三階切く刀を抜よ寤之勢時とあらみ  
立すくみよ死にうり其故は塚と築き今ハ草鬼塚に  
有きり志す太馬奴何と志すり今敵の中へ紛入事方の  
首をたりのもより提血のつきたるを刀と肩よお掛り  
門と返つておち立りたり重長の三階へ追討今日の業因若  
みてはうと今ハ川端にてたれた馬奴とた取らる事捨り  
今事んと池系といふをうすあれはのまの言を常くあはし

中を聞き色しある既よ重長麻帆は腰を括るるあを  
此にるもあつりしう持たる首をあけ斬りて掛して甲はあつを  
てうと打たぬ一の甲をたぬの助合也つあつりてせたの年  
合追切付り其時追討の若たおとろきと坂より巻切り  
ゆさしとつめりり太馬助もつこくあめて先よ  
あり別重長はあ人の頼り太馬奴をた刀と上杉を(実換)  
入あれよ右斜にひのひよりま後け刀をい上杉及  
家康云(進上右あまよまひあてしんん七すまらるる人  
あすの摺上げ太馬奴と号して以秘蔵ありり塚りも

紀伊國極(進上)あまよとあや 最上死

庄内退治の時東禅寺より學東禪と右馬頭一戒の初  
中と斬脱する先は婿塔の尾形討死をす涙と流し中  
あるハ我多しく此敵を境を見せ是は近延たるもの我中  
れハ屋形の討死と名無屋形存するまで人殺を催し中城  
と討死する庄内を踏へ中城と達せんと思たれなり屋形討死  
あれハ我主人をよみて益ありと云て而て返す中城重長  
首実捨しして居るお長なれハ右馬頭も亦三比相下り  
おらうに於て思ふ威の程と老老のものに抜刀と持たぬま  
ち十二百の星鬘金小札に板下の煙段シロコと付くる白紙たる  
首まつ控て敵体の中を押して色々替々老あは我前も

被官之左浦氏流る首取て実捨し主いして云て益重長は強中  
あてまう我前と名無屋形と云らう道ある首と中城入  
投付て東禪も右馬頭と名無首取の二ハ寸はさ刀と  
以て中城もこの類とわきよとてあまよと二折うに中城徳  
巻の徳と一めて実捨し居たる板壁ハ名無斬割たの方  
のゆ返すと斬割服麻より類あけて切付る中城おく例は  
横とたる薙刀と切つた麻札とあしゆあまよと右馬頭と中  
御すと賜うりま合右馬頭より死上内より斬割す中城とよ  
あり又首実捨し首怯と思ふせ凱めは後武を執りいさ名  
世よるハ右馬頭よりお別正宗をう中城別宗暗入下り

東照宮の四十一の由  
今尚存せり年  
三月十日は晴り  
廿五日は雨り  
廿六日は晴り  
廿七日は雨り  
廿八日は晴り  
廿九日は雨り  
三十日は晴り  
上り下りあり



亮と見てるよ  
 たつ矢りり  
 一ヶ所はな  
 流地とさう  
 すりなす  
 前のある  
 ともつて  
 いう  
 とも  
 の人  
 の上  
 一ヶ所  
 らす

めく切あせられしもの首をなげし後河内塚園内討  
 斬あけて後甲州府をさるるに痛形月々死骸二ヶ所流  
 あり程とわけて切先とさし進み切せし程あり持し  
 き各首は流地と二ツの目面は上と下は切あして首  
 先と二ツは盛らうあるふる若くも審してまじきと何あ  
 切らうものあらんと怪しみ思れしに好くして徳信  
 の波行朕意光なる下夜中あはれしとて若くおそれ  
 とし切らうおひしき事降の若く刀あてしあし  
 中あへり此刀と宗勝代は宗勝へ登せしとらわれ  
 一年はとふくその刀あしとて若くおそれとわし

宗勝を先世に城をたて城をまじきとて宗勝をあつめ  
 波刀と刀せられしとすう宗のゆきと研りしとん事し  
 出来しとすなうら新身のおしと若くは元持と  
 竹勝之河内と中もつと此刀は似せおしと始の意光と  
 今之はと冷味と中もつと後之定て一定の事とさるしと  
 身のおしおれしと河内をわしと中もつと波刀は新しとす  
 かし上は志のさよ馬の尾を助程ある穴ありとさし若く  
 さし若くとわしとすす穴をけ穴拙若くしていおれ  
 中上は宗勝合点して河内とさるしとわしとわしとわし  
 他玉の人よゆきと後宗意光のゆきとすしとらしと



常日と尋ふ果して清水の南坂より持来る所傳の  
竹膳意光の正志に依をまひ石田信光が捕に成入所  
あれよの建山穿鬣を成おの似せお仕するものこの  
罪人よとことくくを捕日國法よを確よあられ  
ある竹膳則波刀とい城後へめち降る宗膳のあて傳  
の志清さのも元へ馬の尾と名して又せしひ宗膳始  
法人希成のゆと感一もい名考をよ上すよをき一  
宗膳(宗皇)の別名よられ遂に清沙道具よ成て聚樂  
よる大坂落城の良浪人よて和泉河内の百一落り  
一との沙法傳 台徳院教よく口傳よを成しよ

而初名持おのそのひ美合に名取てまるとい 作おのゆき  
流よ又よすともなりと 或は此のゆき  
上杉藤流上条定實と大將よあまの別り佐美主代の  
佐美長光のた刀と定實よをき一あるけた刀大業物傳よ  
大別のう佐美後河まう所持なれど定實は限らなく  
別異の名と佐美長光と号一秘藏をき一なりそは  
乱靜りして上杉定實女子といゆを男子をくあう尊の  
伊達植宗の次男伊達玄弘とて十三年に成しと定實  
孫と申又生えし男とて一傳ちて奥洲へ下りてあめ  
玄弘と上杉定實養子よ定めてそ初定實の名を

の一字の事なり佐平長光の古刀竹下菫の幕とて編り夜帳を  
表せられい伊達玄敏と別上杉実元と改め天文五年五月  
めをすては誠塔へは来い昔より知父植宗と兄晴宗と父の  
のれ合おありは故玄敏実元誠塔へはよりあす佐平より  
止り住れつめは誠塔へは来い昔より母方よりお侍めて  
い故なり佐平長光の古刀と竹下菫の幕と秘密せられい  
知兄晴宗と父をいふはお海い昔より竹下菫の縁を用  
られい昔より佐平長光の古刀は伊達家より傳りし昔より  
ちよ記す上杉実元より伊達玄敏実元へをいせし  
宇佐平長光の古刀は希代のそれ物なりその傳り

宇佐平長光の古刀は父宇佐平誠中も孝忠と云誠塔  
國主上杉お掎も房定入る常春の家をなり永正五年は  
房定の子息上杉憲定と上杉朝長北条早雲あつて別  
川誠中て一我の時孝忠の子孫河も是なり父子たれおて  
ま方へは川誠表へ出陣し夜に合戦ありある時お見  
の敵を勝て誠持をいふとて出るとは宇佐平誠中も  
孝忠より伊達と切て落しきとては誠持をい切るとは  
徳の掃めて清くより一は櫓の掃と切れりあるは誠持  
の首を向齒して切付る別宇佐平長光の古刀なり  
お中への事なりなり誠中も是と嫡子孫河も是行は

徳宗正治五年四月海内して上杉房能と長尾為景  
生害一國中三年為宗子附従ひしうも宇佐美  
後河守定河守と為宗子附従る忠房能男子が  
一門の上杉玄房以定実と云ふと相争ひし坂本友  
重江東宗以下の上杉信代の玄を信一上宗の城并  
中条柴田の泉水の城と相争ひたり為宗と合戦を時  
義代の長光は右刀と上杉定實は左刀す 武田出づ事  
正好実体は希代の物と云ふして天下の珍物と云ふ所  
なり正宗の刺刀自ら宗の刀は定實の家の御筆乃  
一返七首の和歌ありしと云物数と云ふらす

信長公天下を治めし光忠の刀と好むし山姥の腰  
ちり集めありある時江州安土城へ城元目見り  
兼りし時信長公天下に於て四葉下りしと云うは信長と  
りの町人候き或は好事のものと云ふ一石光忠の刀  
山姥の腰の刀は山姥見の中より一実体光忠の刀  
と云ふもや上りし心算ありけるよは信長を別山姥  
の腰と云ふ見ししては腰元上ありは実体光忠の  
刀と云ふもよこししと云ふあり信長公の心算  
うち多し何として見知ると云ふ事あるは信長  
取上げ光忠の清腰切光の頸よりかくしられし信

ありし久米田より実体は宛取の時根をたき  
柳苗をもちひいひし其時をさしめけし中よ  
夫の如くしよと云ふは長き石津織姫のりし  
なり同上

永井道存は板倉伊賀守勝重と云ふは將軍家  
清上洛の御心あつし口籠中上口籠中へ帰氣させし  
清上洛より先き上洛仕しとのりしと云ふは  
きて上京する時浪人より目及する道存は尾張乃  
右衛門の親戚よきなり立寄る物も浪人よりけ  
ねしと云ふは今夕宿所よりある物も名護をより

て清上洛して別れし其時波浪人己の刀と道存は指さし  
指しへくは流す道存もへきてたよめしうけし  
せんしと云ふはかの器よりと云ふはさび刀と云ふは付入  
しうき板倉伊賀守勝重と云ふは將軍家清上洛  
以前より穿拂中付しと云ふは先し刀脇に數十腰を  
付し道存ちのみと云ふは一の浪人の器よりと云ふ  
さし刀と云ふは一人と云ふは女を付し鑑てわけし  
女と云ふはさすしと云ふは刀よりの研屋にけりし  
腰の中よりしやりの女味をいぬし大切なり又と云ふは  
切しと云ふはさすしと云ふは先しと云ふは内きと云ふは

武田の事  
 刀の...  
 中...  
 唯...  
 見...  
 能...  
 あり...  
 あり...

母く刃の力めていふものの道なる諸刀を切て人...  
 られみく切よ高ふあな...  
 ののあり後之をさ結と落してみるよ刀の...  
 唯物よあ...  
 見れい正宗と銘あり道存...  
 能く結とあ...  
 ありと中...  
 ありと中...  
 ありと中...

なりとうや 同上

一 勝入の首を...  
 先山尺くか...  
 勝入脇...  
 右道よ...  
 けぬと云...  
 勝入の首...  
 中子...  
 永井...  
 池田...  
 あり和泉...  
 小姓...

おけしきそその時 神君引九き高よ小姓との  
泣うまくなるといふこと 水日記

小牧口陣の時軍勢数多小島口出向ふとて秀治云  
池田信輝入道指入敷武藏守長一と先よとて山内陣  
あり大河内政綱軍監と出し旗を収て衣言橋のま  
所くよ果えと依並侍をとりあふ引文城子螺鐘  
を轡とわらふといひしは流地と打截敵儀の事由  
勢多勝りたふ所しき大果の大器既未知といふ文す教  
に敗れすまうる處よ忠量徳人よ勝れしはたき刀の大男  
政徳一文字よ切てある政綱貞宗の他の大河内

言代の刀とみて形をう大男のあ腕うけて切ある  
唯一おきて押さるみよあ腕切落す別代とて  
あり池田勝入敷長一と流地中てる難れは退れし  
なく勝入あるよ腰とわけて居るよ永井侍の  
池田りくれの勝入ち吉よ汝のあやや予の濃明丸マノ  
城と池田勝入をり予の頼政よああをり刀とてお討を  
れといふ永井別池あて勝入の首とてよ也。勝入  
そ時平せー刀と和泉守う形をり刀蓋よ除之雪  
池田勝入所持之と金とみく既いり又侍よ敷長一  
指麾と持平がよおれ居りしと去野の流地あて

山崎の如くある人々を名乗りしと云ふ俊徳の孺子  
一云く賜ひたまふ討に勤め功をせられしと首を神して  
討せり。夫即波れを討にぬ賜ひたの鞘より俊徳と  
金具よ入さしり 大内家傳

八田豊後郷の力と所持すを給ひ人らすのしなり  
播磨姫路まで國清公たの力と所持すなりと云く作らる  
事ともなきは初初清酒の後豊後と云ふなり所持  
口と出せし作らる豊後云々なり所持すは所持  
仕り口をとりて清まるんとして仕と云を所持すは所持  
上りゆりぬはとつなり討に國清公怒りぬし

か希にりりー雜刀と云ふ事と豊後廟と云て  
山崎と云くつらりなりて退出す元來口屬碎乃  
後のゆりけれは口側氣を結め豊後を我よ作付  
られしと押寄する事後長とて口破りての豊後  
事なりぬふといつといひあく豊後と云ふ事後  
清を討なりんと云始して即ち所持す事よ口破り  
是て作らる我酒を酔て既よも方と云付よせんと侍  
たりき我徳まうそ方かよの事なり極き作らる  
事後長云ん後海して退出す國清公の口破りたる  
此れ多しと云や卿の力

二方極より洋似のうゝ名と毎の落とすす留れい  
病とつりあつろを束とるまをさるる可も此日  
の留れをきせし中今長山の町人電金利左衛門不  
持すたの町人の末の末 海陽武義雜傳  
長時云るに今日と限りの金銭をれい長時より  
先すむむとのしりまゝ自然先と持すむむのい  
今生も中よ及りす後せまてしと限とす作のまよ上条  
毎をさりありの長時云清急も何とも何れも裁けりし  
徳とてまよとまよ中い長時善徳兄中尚収極  
小豆系勅命つれい長時云一つあて辰上別軍

と一傳り別長時云沙馬を蒐入られぬ代露の口腰物  
寸短い故沙馬上つろく片の折は甲二つ底よ清切割  
向あゝ割十八時切て後しああ甲別の口腰物とそ  
け時より口名つけと抱い扱各方のあゝわし金銭仕り付  
馬場所徳飯富玄部西巻取軍仕り西巻の内上野と  
中あゝ退き中い晴伝方の首二百元中い野く高のあ  
まつる氷と中川増よ二百の首とわけ長時云牀札よ  
腰とつけ腕凱と口とを抱し時尚収極の口角小豆系  
勅命も口角の口野くま金銭是也 小豆系代記  
小豆系長時格校り系金銭は伝去り切勝り如よ西巻所



別公して海志城へ伝言と申すに長時没落せらる  
其時長時甲破といふ刀ありて其柄たるを以て  
と記せり 武蔵守の書

奥平家より大般若長光といふ刀ありてそのうまに好  
刀ありて光澤院殿の心物なりしに長時公の心より入  
婦川公義の時 家康云へ遣せられしを奥平九郎  
長條兼城の切より依て 家康云より送附せし左刀  
なり 奥平夜俵

左の眼よりあはれぬ人といひたりと申すに又云つて  
左の眼よりあはれぬ人といひたりと申すに又云つて  
平家家の侍たりと申すに又云つて果しと申すに  
左刀と云ふはなるがごとくありてあはれぬ人といひ  
紀伊守といふ者持しを求むるに後丹羽公氏  
長時公の身より海より其の衣服と頼りしを以て  
所持のものありて目と鼻と口とを以て一侍と申す  
勢田大膳持の書に教は納められしを以てそのや  
病即時は平家といふ事なり 同上  
之別は人夫田化十弟ハ家康英士之予も秘蔵ありし



人より神系より押を海野父子と云巻あれど中智も  
右刀と拵拵て二人のすの右刀とすつううまきり  
物十文字の切て海野りたうくと二子傳人一人は  
わつと引退けいまよ十七八の若武者を祇野多  
角事村より依居り中智も痛見まいてむらん  
長野舎人かきりおしき侍とよき侍とて後  
わりの武者なきりしとて宋舟の事あり用ひて  
父のすしすありし高きひくれは依居り侍  
ありあり 加津覚書  
右古刀の侍の時秀を云彦彦よりせたるい秀元

如仕きりしと云と下とて是の好長岡と  
いかりの所持せしは光の脇元總書の果と名付  
光忠の口腰物なり侍とて病ます口秘藏なりし  
らししとて口腰秀元と下とあり 毛利之侍傳  
権現極左則よりなる成口彦の長野清前將野守右衛門  
口出の次々秀力系い中上ははし口出ては極し由りて別  
事よりなる一筋の力之を斬て下なる末は極しと云  
る成別洞中いしは後口腰物なる極は別す右極しは刀の  
試す言はる 作付極しは不は使切中は極しは清前將  
右後清目利年と云彦彦の事なりし由りしは極しは目利

お遠く名口迄ゆく口機橋を斜に王附の腰物に付  
らまはれしをさしひき口極上の利口目利の口を収切せし  
くくしとまじりし名形は眼と塞きしをさしひきし能斬り  
る収中の中より上り出せしを極あててなる名口宛は極て  
左のくもり白今日目眠刀と名付す中上意より則目  
眠刀と名付す他共保昌の年負名代へ所持は極の  
牧師の傳

秀形との賜名骨喰と号を先一人九寸五分の口を  
の百姓のくおらと名付し元上指上は 將軍極の道  
小刀より成中 大津河極上より百姓の著合を極

根心もあま下河海は全百あり下 或は難法

是の陣より月五日河海和泉もあま系徳の程を志曹と  
あすして白後の神巻一綱又と引提嫡子一人馬馬  
一人の十名斗せんよき殿くして退きさゆると大河内  
政保河海と追うけし色大形とちて又あれ法軍の  
殿を双の振舞おしひき中なり集まは河玉の伝人  
大河内殿左馬尉といふ者なり引返し腰刀をさしひき  
手藏の河海は時推系といふ者の下よりきて返す政朝  
らん寺守名名監指揮といふ口をさしひきあまの海  
河海綱又といひて唯一徳と実名と政朝刀といひて切止む

又寄てをさるゝあそ又切止めあはるはちよ切拂ひされい  
河崎うたの綿鬮切て落し首まるして切れもあは  
河崎尻居よとふと綱又と膝もあはりとあぢ守板たれ  
と痛手なれと傷くしとやうもあはるはちよ切拂ひされい  
嫡子あはるはちよとあぢ守板たれとあぢ守板たれ  
和泉守の首とあぢ守板たれとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ

由村長つゝもあはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ

見して及始好ゆ。如あしきと中根之祝而持し元福  
年中之祝を流のとき國本物と成高人のよあはる  
あはるはちよとあぢ守板たれ

徳成泰因法

長尾遠いもあはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ  
あはるはちよとあぢ守板たれ

清とのちどしと組中うちよお長ちどしと吹笛を振  
中申書江為清の力いお店家来未明本今子持い又を留  
見書と討つる力いお店家来未明本今子持い又を留  
をい書を戦後のを留と申お店家は世世の末  
そいりりあ水及びい お戦書記

築田孫孫二九番後之河以来清きと申上小物清陣と云  
清書兵月山の口力頂戴仕也

一 ころいおんあす月山の口日比と云おんあす  
おんあすころいおんあす月山の口日比と云おんあす  
ころいおんあす月山の口日比と云おんあす

清佐よはららしたと云いころいおんあす  
ころいおんあす月山の口日比と云おんあす  
ころいおんあす月山の口日比と云おんあす

四月十日

清書陣判

おんあす鬼九番と云 お戦書記

柳やな回鬼九番ち割の仁あて月山の口力いおんあす  
頂戴仕也と云おんあす井伊無部山牧口陣中と云おんあす  
上あしつういおんあすと云おんあす上あしつういおんあす  
おんあすおんあすの口力いおんあすと云おんあす  
鬼九番と云おんあすと云おんあす

る 相海物語

大納言極之池傳之の口腰物す一机落しし傳承中納言之殿  
上極沙好の附け口腰物糸机落しし是より付ては口腰  
物す事し利家存信

酒井左衛門重年九い事任長へ私事ある人々を厚く  
稱せられ九い事傳すは長條勝軍才一した也つと  
考の果と焼斗策成功甚しく感一橋の上一文字れ  
り目より年後友後友 級付の羽織唐織と授けし目上

天正三年霜月廿七日中川遊之場口礼は古池田へ徳儀  
伝長云より四吉力梅の口腰物并口馬皆具大なる洋紙同年

十二月二日女部二右衛門 徳儀重年より一の忠告に入神妙  
の物事感する思は申して亦くゆさせられは口腰物  
は左文字の口腰物と申す毎口馬皆具大なるお似口を代  
として今記に取ねるは一機別の内門をく郡と作付あやむき

光澤院為禪云の口腰物なり松永之好義傳とす、先  
承徳八年六月十九日清和へ押寄奉付く口腰物小山  
鹿苑寺の園高と、平田和泉寺とを、一草紙鹿苑寺殿  
清内弟法を山内神を揚めて平田と別ある、是等の口腰  
物覚慶南坊一宗院より取らりし、長島云部大幡後孝  
斗いといて思出させ給ひ言は流儀其徳の長井

釣と四軒皆口妻なすれは長井喜之のまゝなる所な  
とて出御服階り一のまゝ時人の意事なり

とてあつてはまゝ前のみり口身の長いも短くも  
せす

之後縁あつては長くと短くと定むる所なり  
せりあつては服とをなすり 後縁或は

河洲のむ父宿て同河洲のむいさ都のむまなれと  
口脇をとりし世首の結梅なる梅の如くむ六十八人  
一人のみぬしては口を梳巻の鞘めて高巻の扱きと  
人毎の扱ては絨の男とい用るゝとすなりとすなり

山中の元氏をて或用るゝもの一人のみ一昔河洲  
海辺の城をた進り監者清より一人ありて成功せり  
隠れり一自口をゆゑ事と好て濃州徳洲の辨法と  
扱き世等とたよ孫を扱て口をゆゑ後年上をみ成て  
その他世子造り人々用ひらる海辺赤く又あつては  
して作本と切りうゝ又あつては 南海塔乳地

丹後の一をと細川に姉妹尊よとてまゝとちり  
時と振舞の行交あつてはゆゑよに沙の力も扱腕は悪  
なるゝ中強周防怪我の体もとてなり一足ふて踏  
む一足は妙とに沙に扱りて一をと付まあつては



波のいやく細川をよお借りのい録を治長とよき  
二人守降給 或は難化

村井豊後十七とて初て融とを刀折して首とを  
豊後刀のい人守一文字あり故の甲乃志と後よ南  
りの舟捨しとてその方数年とある一あやふけは村井  
左馬助の海軍のい事 利奈治法

山中康助天正五年秀吉の命よりして播磨上月の  
城とある島井新十郎茲矩秀吉の使として悪んで  
城に入り康助のいごとく城中のい七百人の我より  
寔めて圍と破るとい兒女病人とてい年をい

そのいごとくい遊走しや人と捨てごとくい事  
とて我必ずいごとく我を人腹と切て数百人の命とを  
助けんとす秀吉の厚恩謝し我い海をれ我を滅と  
去よ茲矩志めて侍れとすすいごとく我をい後よ  
るごとくいと我よ入て茲矩別れと惜む康助主代の  
新身西の刀と出していごとく海よりいごとく遊揚り  
せん 島井新十郎

村田固備も合戦のいごとく系勝とんいと切崩し極  
勇と振事鬼神のいごとくいむ年五合天正十五年  
二十跡城新合田海城と村田固備も意光とん守の

右ノと後深月毛の馬も新精を七百して常勝と名と  
新交切之返も色欲修理の由へ新交討死水軍死  
婦門我終て伝書云 権現極口語中へ唯一掃蕩  
しそ成中意いも今日へ返中意いしゆゆも 家康云  
謀極成として心感も斜思とい世史 徳川家康中へ  
いとの能合我仕は生きたるへ返中意いしゆゆも  
いそ成中意いも今日へ返中意いしゆゆも 家康云  
為言月事よて敵よ之離る事と所知として感も  
権現極口家中へ流る返中意いしゆゆも 徳川家康の時  
水野左衛門のち切ある甲の病と切別向蓮は切討ふ

此ノハ水野下野書後より綴るを隠切しおめてはた  
権現極口の能なるの返中意いしゆゆも 徳川家康の時  
事よ正經いしゆゆも 徳川家康の時  
上野板花も合我あるあり初の軍法時去肥大膳薨  
佐徳も水野いしゆゆも 既も軍始りて入死れ我いしゆゆも  
大膳一もよ首とを借返り持せて家捨よ入んしゆゆも  
奉降よなきしゆゆも 徳川家康の時  
成て入んしゆゆも 徳川家康の時  
向ひし膳厚とをたすも 徳川家康の時  
忘しし水野も槍の皮の鞆と討しゆゆも 徳川家康の時

まよ感てらるも矢を射ぬ大膳と目をみて切ひし。  
大膳をとりてつらとめ何もうと口の脇有つお射  
せす由の射らるもまよのまよはる由くまてまよ中。  
る一とるまよの由一馬を射ぬと當て一飛よとを馬  
飛ぬと一まよの目の由のまよを切とまよのまよ  
おつひまよの飛ぬまよのまよの飛ぬのまよのまよ  
ひと等しく馬を射ぬと一まよのまよのまよのまよ  
討ち一息絶てぬまよのまよのまよのまよのまよ  
せと伝説まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
たの働とまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

まよ名うるまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
切とる刀もまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
たり一刀なり一まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
両指とらやまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
看と後河まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
を討捕中ゆ依くまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
しての脇元政洋順のまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
依見めて伝大名まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

んせ我家の三代と自慢す。かゝる清正の格料あり  
ち悪光と出—其の我家の三代なりと語り—其の政宗  
云く三代と云ふは若しうちの家の格料なりと云ふ  
を後一一代は出—人なれ、三代と云ふ格料—と云  
清正惣て幾代傳りての用よなきと三代はつと云  
そのなりけり。我ホ一代は幾なり用よなきは出格あり  
口重代よりそのの—と云ふ—或は難法  
元龜四年二月十日松永源正降参—て波阜—弟上  
ありあつた國領の口弟研後四年の賜死に—あり  
そ何れは天下に及ぶ格料なり 尚代記

今島伊豆七月廿七日飯沼の島に市へ出て口の口を  
切せられ—其の事思ひ二ある—と云ふ—は—は—  
見付て付んと云ひ能き法と云けて—の口を  
なく用を—ある若し川の習あり切せられ—ある  
られ—の口を能きて是れを是れと云ひ別の口を  
と云ふ—と云ふ—七ある—と云ふ—ある—ある—  
目よりその口をすり合て—ある—伊豆の口を日光の  
別所へ—と云ふ—の別所へ—人の口を  
物とある—と云ふ—我れと云ふ—と云ふ—  
この口を—と云ふ—と云ふ—伊豆の口を

九寸おらの脇をわて人と突あく絶死せりといふれい  
流流まゝ人の形と満ちりあつたまあり其内のま  
ならんけし人といふまされも控帳の控の御ありき事  
神勅をせんはよけいといふと凶給えん中いふいふ  
あやもな理なることと人といふいふ一列の御あり  
帰らぬといふれいといふいふいふいふいふいふいふ  
あやもな理なることと人といふいふ一列の御あり  
天文五年十月より長明大いよ怒く如何極味方のま  
膨痛あてまを有つらんといふいふ長明大いけしは法務の  
絶と汝等も知らせんといふ真んうけそおておま目の  
将軍なるい赤地の縁の御ありいれり相のすそり那

おと打たるいあやもなといふの理なる其國のい人  
い等の面影といちりいん七寸赤銅のりのま代の口をり  
二振といふて法城のち長りと莖終りた鬼月もと  
りの名馬よ湯沼の梨地に結きて紅のたあをを白  
あつたをを唯一瞬よ進んであまのい坊もあつた事  
以下馬といふ二千<sup>十</sup>日接とそつて愈おつた長明の口馬に  
奥羽の首西度より古跡一の名馬といふ事進られり  
あつたこの事なるの馬あけその遺物ありき事  
あつたいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
新軍へ進入境のいふいふいふいふいふいふいふいふ





一二... 時井... 討...  
 後の... 追首... 先ね... 馬助...  
 湯... 徳... 彼...  
 見... 一... 位... 合... 味... 先... 赤田...  
 備... 備... 保... 赤田... 代... 世... 後... 赤...  
 捨... の... 十... 間... 倉... 備... 人... 一... 手... 合... 離... 利... と... 能... して...  
 赤田... と... して... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 元龜元年三月... 日... 以... 別... 中... の... 赤... 備... と... 言... 事... 赤...

為親書

樂... 赤... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 元龜四年三月... 日... 以... 別... 中... の... 赤... 備... と... 言... 事... 赤...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...  
 赤田... 備... の... 二... の... 見... 上... 野... 平... 二... 三... 備... 是... の... 先... 元... の... 文... あり...



多りの別所をいふらういふ使ひおまほ集双た刀刀脇元  
衣懐形かきよとせ兄の山に事う腹切くる脇元とえ持  
又青い進い丈夫は腹とあ日一

天正二年七月尾張守長為よまの地を便と一  
一向宗道玉の逆流と集おふ人楯元うくれの日月廿六日  
信長と信忠とおたつ勢と一幸して暮向一一日に  
よの信忠とちねめて都合二万騎よて陣元あれは浪川に  
お城かえを清めてと勢満きたり勢元弘二万降殺よ  
えあてしる備前もとちねとてお出ねおの城と  
た一向の舟と陸よてう新地をよを先と容お致る。

蒲生父子の如きをいふは其の氏編生年十九歳  
なり白赤のぬえとわけ大城の隈とよお指長よおあ  
秋野と造し。直まよま代のたのよと座陣の丸鞘よ  
虎の皮は鹿鞘りけてまよ白毛なる馬の尾髪絶と  
きて冬連とよは道地の鞘と玉厚徳の鞘とあ打斗り  
をこくおまの先よ大河の馬とあてとあてと松の  
後の先陣よ氏郷なりとまおまよ名宗向の馬よ狐と宗  
あうま唯一騎おの志申へ城入能様よ破色れは銀の  
鬼作なりとまおのちおの中へ先入て働とて何  
程のゆりまよは但てと馬よめては但てあ馬のる



長井を引掛いさきて長井へ降りし。加増と云  
薩州の地とす眼あめ味方え流られ龍谷よおうふ  
如し其修めをたすむべくし自身切て出く氏邦と  
右の略有と決せんしと東条誠の禮は形うつな  
甲と云ふ人おすの者しゆりのちりよ一人おすのちり  
十文字の標くく九すお分の後色に父棟徳合なり  
ゆりしる滋野重代のおにいまつとりゆる徳つさけ  
敵いお勢の多ゆよりす軍徳一ゆよまるとお百餘騎と  
つまなり一車おしつよわけしとて十月廿一日午刻よ  
お出たましし同上

柳うぬみて佐久百玄蕃助法勢踏及中陣特のちの  
同勢とまち徳大返しお指返し口ま中軍の成老お分  
多し勢おめてゆ徳らおま樹とりちの果は一戦て徳  
徳と合せたりとち合中し中後しやうしん大為の敵徳  
以赤矢二をし脇のちり射えられゆちをなすゆえ  
ゆ痛しゆとちたのちかみお子のあひ射付られ  
ちんおしてゆ弱くお成おしなりうてし事あるゆゆ  
四部ち極し極し何のちりしゆいしゆ日四部ち極  
は勢お皆白糸のち具し一人おすのちりゆしゆすのちり  
あいの後ゆしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

あはれいぬん中のちひさきとあんな〜ちたて日

一将軍記

角て馬正の比音称孫四郎着川新に所としてあゆ  
あうけ友人の唐回のおあまあ〜一対雙さす時  
わうとよかり音称か石一いちい地ち地ぢ二つめり筒すじと持たれ  
一二出いっしゅつ一ま二の目と赤ハ音称う有差門暗くらめられ  
振一めて赤あを差門出賽しゅさああ〜目数多ありと  
えてうち〜る賽さいとあ〜り〜と押お按あ一二とらま二  
一二とを差門うと〜るあ〜一二の目と赤〜るあ〜と  
音称一〜りとして二つとと破後利ととる拂はら差門ハ

一二とりの賽の端はめて互は詞客く〜音称賜たまは  
ととをて宛人とするあを差門音根うあ〜ととと  
え音称大カよあられておまかり〜れハ揺動ゆどうゆあ  
差門ゆさぐととと離と清く宛人とする其その境かたとて  
御ご介けよととと離はり〜るれとと童わらわ郎らうと一あ人ひとをて  
奥の心こころをたれハ人不知童郎を遣つか遣つかあ〜と鳴り  
あれハ侍事しやくじハ〜人音知童郎を遣つか遣つかあ〜と鳴り  
押お通とあ〜あ〜音称縁ゆかりハ口くち入い〜花はなり〜男おとこた士し  
カよあ〜く〜たを刀と合あせ賜たま有あ〜とととと男おとこの  
知し念ねんなれ〜入い〜事ことの程ほどとととと〜といはれ

荒門も勝つる。辭書の如く推系なる詞ありては、  
の刀中切てる。若しは、若しは、二人曰ふ寸の寸  
少く教く、母切合而と傳事、數多、引、或、押、滿、て、あ、人  
と、由、に、之、を、免、自、負、た、る、と、教、く、は、連、て、引、合、を、能  
療、治、し、て、自、底、方、愈、ま、れ、若、し、は、若、し、は、荒、門  
に、云、送、り、ら、る、我、等、自、底、平、方、を、愈、り、申、度、由、宜、め、  
手、取、回、り、た、る、一、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、  
平、愈、の、時、あ、り、て、お、持、免、角、は、水、で、固、二、刺、し、お、く、  
勝、負、の、上、あ、り、互、い、の、情、と、傳、人、と、書、送、り、ら、れ、荒、門、  
返、答、よ、云、く、自、是、欲、す、入、如、は、適、言、引、れ、我、は、若、し、は、人

と、申、し、甚、所、へ、は、お、も、う、と、申、し、あ、れ、必、持、入、り、け、文  
大、申、し、と、書、あ、り、若、し、は、荒、門、と、是、水、も、果、々、ん、と、  
お、い、能、け、た、る、も、お、い、な、る、と、返、二、尺、七、寸、の、ち、か、た、  
お、い、能、け、た、る、も、お、い、な、る、と、返、二、尺、七、寸、の、ち、か、た、  
三、尺、裁、極、も、ち、り、り、り、唯、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、  
若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、  
文、流、し、て、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、若、し、は、  
申、す、最、末、葉、書、記

吉門書助小田京四郎は、お働の四條の  
権現様より、口腰物、大、小、係、は、口、口、口、口、長、二、人、守、弱



忠と彼と人とありし浪人よして舟に乗りし幸いと四つよ  
なまこり新ととん人にもとてし中一に申し  
あつたよ新ととん人にもとてし中一に申し  
わらわもさるる虎とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
回之内赤名流とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
古侍事ともしとて流とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
あり流とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
用よとて新とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
のゆく今交の物と長き我なり因道友長き流とつれつるを  
合せ流とつれつるを思ひなれぬ義仁と也

切折るま時刀折りしは赤脇を括るよ赤脇  
折付とて新とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
式時流中流とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
しとと井とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
五よ赤とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
しとと赤とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
より赤とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
し用ひし赤とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
日中の武士脇刀とつれつるを思ひなれぬ義仁と也  
中七よ赤とつれつるを思ひなれぬ義仁と也

土倉をさしごや巻としてチサカ指山はせし礼法なりし  
 軍陣の時打刀として古刀と奉りし武家風習のなかりし  
 土倉の禮と志あり肩衣と字彙袍の裳と識し士袴  
 子帯一さや巻と賜免は仕替へし中脇免として  
 出仕する礼法と志あり武士は戦場ならぬ所とたよ  
 打刀を指添ていつとちく二木指とにもちけし同  
 様おとせし一列の古(ち)ちりめて中古以来  
 武家列の列より入りしとて杖竹として四人の竹杖  
 割て袴羽織おとせしとて袈裟と云はり  
 今ハ過るなりしとて杖竹を様おは仕替軍陣の時

鏡ととせし武家風習の風俗也 古き物

池田に古刀及家系痛入るる内より賜免とおすまれ  
 たり右の如き故なりとて家中よりせ法おられなく  
 ぬ得しは是れ武家と申しとて暇と云はれ若し古刀  
 おひと志と申す一とおはるるもよる入るる習は刀  
 賜免と置まれし事候也そのもくをせよは付て暇  
 と云事候なりと云ふる若しおぬみ子細にむし一果  
 四節も持たは日中を双の雷士よて武家立派法師は  
 られ遊くを指しちしちよは志はせんと語り武家名  
 宗候ひちりし際も武家と志候はるる多くは切



われあつて一時に  
 涙流るるをゆき  
 にいつくは刀を  
 とひい一日又も  
 あまのけりや  
 平白をさす  
 いれれいふ  
 まぬや  
 いひは  
 死に  
 梅  
 人  
 元  
 を  
 中  
 あ  
 ま  
 ま  
 い  
 ま  
 り  
 の  
 死  
 死

挿ひそこあてし  
 体息せよおの  
 刀を隠し  
 おもあも  
 痛入る  
 或曹の  
 乞す  
 おく  
 わや  
 りゆ  
 弘治四年  
 け  
 上下  
 と着  
 法  
 り  
 周防  
 と  
 不  
 して

この物語

弘治四年景虎公野洲より入ぬ  
 け  
 上下  
 と着  
 法  
 り  
 周防  
 と  
 不  
 して

如しと定む其相状取持法を記して敵の押寄に對峙あり  
しめ二月十九日の暖身脇丸の中あり健ちる壯士十人と撰各  
席の角打ちする首獲を記すは津長巻の折方刀あり斗まると  
一板の櫓せし先二折りまをわけて軍使十二人所傳に浦添に  
山を疎り市鬼少為ゆき市を味とて備え大徳寺を市に把り為  
は兵部之折方馬助松田敏中も松代新ちた處の海野集人三井田  
茂七席浮上ゆ物合の芭陣の指物ありの石印を記し  
白布の神書として二折り備てその前題とすす其壯膽激烈心  
長より勇く敵を死ししともしふ科しし白旗ありて捲きしめし  
甲冑を帯せし素肌ありて馬とよゆの道服とてしし麻毛の

馬の鬃ありしは金髪痛の鞍ありて宗徳十文字の槍を握り  
例は四半のその字は旗と旗を引標井内益助小門付すそ  
以て十四騎此が身脇の隊長迫る様目の宗徳折には城  
入り及意安き門に伊豆守上田能也と古の中智恵由林た系重東  
田刑部が備え井澤元重取流た也浪田牛し物以下も又輪と  
白布ありて色は臨馬ありて公の左方をお囲ひるは後合に  
寂しく切流とす出福魔竹葦の如くに敵と列を記し備え  
敵陣の中と更なるまきしるありおく脱せず一文字は押越え城  
の糸色と記すししは佐野昌徳浪甲に平騎ありて城を記し  
甲て地を感涙と流ししと記しし連子入城ししと記しし

まゝのもの、虎兇爪角を能く事あり甲兵鋒刃をあらわす  
能くすといふ事と謂つて一氏政徳成と始として腕を  
振る齒歯と爲す南方の軍士勇へ双へて服あり守居  
ふれと神化の武威魏くとして膚たむまは服を治るす  
飛令盤石の楯を衝令鉄のらと扱もはたくとも野と  
足す凡史の可爲ありて都のいうちるはらんと陳執  
して息をむとめられぬと事虎は徳治ると謂罵り斗あて  
執きて鬼向ふべきを誓するもの一人はねく是は編刀八段の  
天草結天雲の着働一の風情をくめと離れ味方の一圓の  
吾とありますといふありて信こそ南方の法軍將軍

ちよまをのまれ忽ち多あめて城と攻んと能するもの一掃は  
ゆえれも氏政の神功ありてまよ圍と巻解一掃勢を古の  
まて退けらる。わがまを

永福四年九月十日川中流の戦ひ事方より一掃長巻の身  
賜所給生鶴毛の馬赤よをて馬廻と改之難御す同上  
慶長二年を同る藤入と名をい日本の法軍將軍はたせし振れと  
権現極徳永法中より作舟と名をい舟井伊志波が浦の  
上使若令百枚中巻二十振り被二十掃は仕徳永法傳

慶長五年八月朔日 内府極江戸より四三と成り舟て四長柄  
口徳義の仕の重酒井徳義の村軍と名をい舟井伊志波

山越の山中なる所方より群柳助九郎組の先方への  
考めて山越の長柄の返りていふ交は 中納言梅屋  
つたよりいふ御よ八王子の返りていふ百人の返りていふ  
とあつていふは 甲州佐玄の中寄りていふは 甲州の  
返りていふ甲州の返りていふ甲州の返りていふは 龍  
あよ五百人花の返りていふの返りていふは 龍  
返りていふ付中寄 横目と名付中寄りていふは 津南  
山越の返りていふは 作付の長柄の返りていふは 大和  
返りていふ中寄の返りていふは 龍 慶長  
夏山越の返りていふは 龍 尾張宰相及後河

宰相及山越の返りていふは 將軍梅屋の 大津所  
伏見の御より津島馬山の尾の山越織羅の唐人の山  
返りていふは 多上野の返りていふは 横野と中馬の返り  
大津の山馬の令の廻り山越二重の返りていふは 大津  
の中寄りていふは 山越の返りていふは 龍 慶長  
生実の山越の明方より戰場へ二人と七寸の返りていふは  
御く返りていふは 大津の返りていふは 大津の返り  
を明拂りていふは 大津の返りていふは 大津の返り  
とていふは 大津の返りていふは 大津の返り  
大津の返りていふは 大津の返りていふは 大津の返り

付しあけ人を矢子射しとて葉の如く射るも用事未だ  
十師様井と射んとて追つけりしに名用り首と相討茶後四巻  
之舟の浅野洋を衝と死治とて左岡(目)もあつた  
右岡も唐織の夜衣とめし強疾とつけきて口をひら  
え花あつたさうと花あつたさうとさうと出られとて  
口穢嫌めて別草毛のさうと右料の鞍とさうせられとて  
のの(野)射とやらんとてさうとすくげなとて誠希の  
ゆりーめてらんさうりの刀とて或切難記  
慶長六年改徳津よて返田う軍と上田をい出とて  
る寺修の馬よふふんすのちちりと雷光稲妻の如くてい

うー敵の群てと虎へらんと押迫ある中へ破て入る  
あての思ひ出と口方へ面を蕪れいさーのち勢一人切立  
らん流の木の葉の如く一をよ添とて除と其後城とて  
あつた や誠事記

真柄十師た馬宗家の水陸七をまな双若太力の勇士さう  
むん守のちちりむねと依る程めて行く車痛の如く  
まう向よまらめさー波よ合まよ向て切伏実衛一敵とて  
追捨て數十事と討殺す其因も誠希射たことを記し  
さうり真柄の誠希四とてさうり誠希の酒あけ朝倉  
のあけさうとていぬさうとて今交り別(あ)ち向あつと幸ひ

なれ晴なる軍して討死し再度放卿い海よりさそと  
云致つて妻子女の眼乞しき出せし程の勇士をれい今と  
らうふしと思ひ置りあまの敵を追拂て獨田の時よ鷹と  
あけて皆く息絶せりけりよふ洲の割の共自坂成部  
生年十の歳終をきて静くとの事なりま搦たる揚て  
やまの美武共や果の朝念う信代の信志搦十の歳と  
りあきん歌よて乞静に腹と切りしとあふいとあまの  
きいされ我首をてるあふせよとりの成部う兄さ師さ師  
の師は師二人のや武部とん徳て地なる常志の國宗宗  
徳をきて徳よりま搦に乞静に腹と切りとあふい程ふ

又敵多く成るはそをの又追拂てまや思ひ置ん力をと  
振るう討てあつる敵四人とあまのうて皆討死しつ終り  
此あふて討れりると自坂師さ師をきて終よま搦て返と  
この宗宗の嫡子ま搦十師も父程のこそなまあれ書あひ  
敵とらりあて父の同く働り四人と寸のたき刀を打振て  
敵多の敵と切伏せお伏せ物きく為のひたうりつ父の  
ま搦て討死をすてま終はて返り是もこの河の勢まま  
雨ちあつと海り合ひ又大出る程裁いて終よま搦て討死  
し此を不た地りあてあられあまの信長は馬屋の人数をあ  
してあ徳徳と拵庵と敵の拵合より寫てあられあ

せられし事もあらはせしむるに  
うつて相倉儀井方の老翁孫助軍にて四角の方へ教へに

迎敷しつり 相倉老翁

張樂寺にて同極の作止大納言極の内沙して蒲生飛騨守  
正宗とも先年の遠征して中悪あはる由ぬと中悪あ  
しゆと上極の為りぬゆはる大納言方にて中悪し極を  
心念より執事ちぬ人遠野守正及徳吉院長忠誠中お成念表  
有馬のあ法平佐竹徳徳後よりわさ人口出して接のるまで接  
心念の正宗後には三の肩衣袴のうへは昔靴のきこひたすの  
大脇あしてたまは飛騨後には三のうらめしこの脇あして心念

徳吉院佐竹の正宗方の思召あして心念は孫正後、正宗の  
心奉若ちうされぬを飛騨及とも心あわつぬは正宗後、心を  
人あして押さるぬきしぬりよは申は心念極脇あよあな  
心目より心念後、たいていなるは三と心接授なる心あて  
なされは正宗後、心念の心行あつて心念あわつ心念はされぬ  
はあし心念若ち心念は心念と心念して心念は心念後、心念  
され心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は  
中へ心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は  
心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は  
心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は  
心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は心念は

飛騨まゝのうらぶら左極のうき地思のう人ふて言ひなむの  
山車やうのうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
言ひなむのうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
感利安後信やうのうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
福壽左連のうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
繪の列ぶておるうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
多し心ん心守の海前無光未鞘の大腸をうらぶらうらぶらうらぶら  
うらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
一膳の別段の因に飯合よきのうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
おらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら

わらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
事らんうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
同わらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
わらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
入し時腸をうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
と帯入るうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
切をうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
同く内血流出てわらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
未睡眠也後刻事らんうらぶらうらぶらうらぶらうらぶらうらぶら  
とよて急光を鞘の納めある危命をわらぶらうらぶらうらぶら



ありしつうなるは仕止性男如ふ入交り仕止しを後事  
に及しり族ありしう族を交する威ありと云しつう目録  
しつうのまじりしき

徳持物語

清正則物事此の大名の善法場あり石枝はとう善の時  
自安の子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありし  
多子と云なる一と敬極の子と名付と云工場ありの時石枝は  
清正則の子にちとつと云しつうの時と後自安の子とせしむる  
正則の子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありし  
しつうと云しつうのれに工場ありしつうの時と後自安の子とせしむる  
子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありしつうの時と後自安の子とせしむる

ありしつうなるは仕止性男如ふ入交り仕止しを後事  
に及しり族ありしう族を交する威ありと云しつう目録  
しつうのまじりしき  
清正則物事此の大名の善法場あり石枝はとう善の時  
自安の子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありし  
多子と云なる一と敬極の子と名付と云工場ありの時石枝は  
清正則の子にちとつと云しつうの時と後自安の子とせしむる  
正則の子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありし  
しつうと云しつうのれに工場ありしつうの時と後自安の子とせしむる  
子とせしむる好むと云しつうのれに工場ありしつうの時と後自安の子とせしむる

た逆ちと事一付よと事一時蓮池うと正則一場の老をい

是時少くも一皆侍りていといと幸長見振（西）と事一

大永五年徳宗少て里見小糸の裁いよ山並系保平治お

備より伊友と付せしと防さぬ物に山並系保平治お門

西希安西武部中里新七と事一但安西大力故山並系と但伏

首と事一中里ハ相門ハ但伏られ老く人くく物に中里

保平治と事一若少て下より九寸と持て居色（居）と事一

永禄七年譜の巻の裁よ小糸方中心新義平保平治山名

ハ神洲名山平治山名保平治と事一但谷名切を中平保平

保平治と事一但て山名（山名）と但伏せ首と扱平山名ハ平治

扱平よ切て事一保平保平と原の山名ハ平治おきんて切

これハ別名ハ保平保平と事一保平保平と事一保平保平

と事一保平保平と事一保平保平と事一保平保平

大正十年西上総の裁よハ女村の西と事一里見小糸助後院

危く是ハ山名保平馬余と事一追をハ十人虎の中よ

志回保平保平と事一保平保平と事一保平保平

上よ保平保平と事一保平保平と事一保平保平

実切ると事一保平保平と事一保平保平と事一保平保平

保平保平と事一保平保平と事一保平保平と事一保平保平

つうす本君程をみてわうり寝るすま子寝つ寝つて起す<sup>里</sup>  
 上の山のま子のち持女村造酒と推那流七事よあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就  
 せむい海とあまて加勢と乞乞静うよあまをさやせ  
 海七事すしちしひすあん案さああしすあまは谷  
 城といふが修理石目あはるあま持父子と討死上杉後の  
 口感あまあうらうらうとあはれいけ城も他の勢もあしす  
 あはるん事あまあうらうとせんとあまあうらう城中の  
 勢あつしつと押那流七事あはるん事あうらうあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就

むしくと寝をむし一故軍方入れ馬煙とまて時うつは  
 戦いあはれし敵は今般より多くあつたあて誠まりて法軍  
 つくれうらうとあうらうとあはれいけ城も他の勢もあしす  
 あはるん事あまあうらうとせんとあまあうらう城中の  
 勢あつしつと押那流七事あはるん事あうらうあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就  
 あはるん事あまあうらうとせんとあまあうらう城中の  
 勢あつしつと押那流七事あはるん事あうらうあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就  
 あはるん事あまあうらうとせんとあまあうらう城中の  
 勢あつしつと押那流七事あはるん事あうらうあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就  
 あはるん事あまあうらうとせんとあまあうらう城中の  
 勢あつしつと押那流七事あはるん事あうらうあは  
 け城といひしう地巨くして一人もあはるん事成就

うゝれて死もあらずに後ては及一あつて地すま。切腹及  
中布入りさうさう南のさむい谷門あてり丁程馬あつた  
物あつたきさよして木村造酒元徳早替あつたさうさういけり  
杉本光種あつたさうさういけり一殺しと物の子徳とて返す  
阪谷玄徳と名あて押さへむづと組木村元千うあつた  
海玄徳と名あて押さへむづと組と名あつたさうさういけり  
とて一さうさうを振りさうさういけり一さうさういけり  
と名返一乳髪とて上首と名あつたさうさういけり一さう  
の切先  
母さうさういけり今あつたさうさういけり一さうさういけり  
海玄徳と名あつたさうさういけり一さうさういけり  
とて一さうさういけり一さうさういけり

天正十二年庄内退治も園根の城あつて極野左衛門尉討  
死す長柄子の堀原の攻合城あつた庄内は徳川の徳川家康  
後の方へ人数と遠く園と揚城と名あつたさうさういけり  
左衛門尉と名あつたさうさういけり一さうさういけり一  
百二十人あつたさうさういけり一さうさういけり一  
あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさういけり  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
附入んとするな又て返して殺す左衛門尉と名あつた  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい  
と名あつたさうさういけり一さうさういけり一さうさうい

と人切伏せる人よと有らせりつと挿てんか討集  
と彦と名寄て互に馬上して槍銃むたて能給とや思ひん  
返寄てむつと但お馬の馬よ成上り成しお成能合し能給  
味方も入れける中にお人かよ助寄る所迄もちを内り  
と彦様通一の脇を以てたての腹つやと實通一保教呪を  
槍落し尻と踏へて起上り黒川へ働地固を邦を侍中  
との稱寄るく 善親武造

大坂陣系脇の口は鴨野の系脇内坂田のたてと大坂方穴津  
左近と勝負を交す穴津は隠れ寄る長刀つひ坂田は隠  
され穴津上をたれは徳と合すといふやも元は付入る事

坂田押付け但付たり穴津はたか之坂田は元武若きうられと  
おるさお入押寄られ作けり成しと穴津坂田の首とらと  
脇寄よととる坂田さる物作られたのよめて穴津は接  
うけける脇寄一の柄と押へたのよめてまゝ指とぬき根付の  
おとあくる御一穴津の首とせしうかよもあまのたき刀  
坂田の首とあり坂田のよしといふは穴津おのうと量り自持  
して長脇寄とさるは我の首とせられしといひし 武若に法  
道明の合戦の薄田隼人の水野日向もう御(高)討死たり集  
倭乱れて徳幸退といふものたれ芝居をさる(働)水野  
日向も人(川)村新(舟)重長あつて徳と合を但付隼人

とくは  
あつた  
ちり

たか量よりして別たり新へ申し善海一職一との故もあつた  
あつたを以て突るも年人へ告あつて新へ申し後の上を新へ  
切年人あつたも善海新へ申しと突るも一告あつたも申さ  
新へ申しあつたも善海新へ申しと突るも一告あつたも申さ  
あつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
権現極深松よ深松極深松よ申しと突るも一告あつたも申さ  
てはと申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
且又あつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
としてあつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
の字は清書面を改  
あつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ

物よわくして水谷伊勢守も一合百枚もあつた  
改た少刀せよ名もあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
日本の武士敵の首名及捕敵と申し後日新陰抄よ申す  
あつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
てはあつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
割ると申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
天正祐定の刀もあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
冬清陣の時天正祐定もあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
晴もあつたも申しあつたも申しと突るも一告あつたも申さ  
切破り堀下もあつたも申しと突るも一告あつたも申さ



諸君に城内より、法地と申す所と申す所の、  
 降るめくちれし、さらば忠れす、  
 忠直の、忠直士安西勅、由、  
 三人、政佐と申す、  
 名と承知、  
 善、  
 の名、  
 賜、

の、  
 彫、  
 答、  
 政、  
 名、

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are dense and difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text appears to be organized into several lines, possibly representing a list or a series of entries. The paper shows signs of age, including creases and discoloration.



